

第 266 回

市響

室内楽の午後



1998年3月29日（日）

市川市文化会館

市川市教育委員会 市川市文化会館 市川交響楽団協会 共催

OTTORINO RESPIGHI

オットリーノ レスピーギ

ANTICHE DANZE ED ARIE PER LIUTO / 3^a SUITE

リュートのための古風な舞曲とアリア 第三組曲

ITALIANA イタリアーナ
ARIA DI CORTE 宮廷のアリア
SICILIANA シチリアーナ
PASSACAGLIA パッサカリア

VINCENT D'INDY

ヴァンサン ダンディ

CHANSON ET DANSES OP.50

シャンソンとダンス

CHANSON シャンソン
DANSES ダンス

JONATHAN BRUCE BROWN

ジョナサン ブルース ブラウン

STRATA

FIVE PIECES FOR PERCUSSION QUINTET AND TUBA

ストラータ

1. ANDANTE 2. MODERATELY SLOW, REFLECTIVE 3. ALLEGRO CON FUOCO
4. LENTO ESPRESSIVO 5. ALLEGRO MODERATO, MAESTOSO

指揮者紹介



江原 功 (えはら いさお)

桐朋学園大学卒業、同大学研究科修了。指揮を秋山和慶、小澤征爾、堤俊作各氏に師事し教えを受けている。89年大学を卒業した年に、フランスの IRCAM 所属の作曲家コート・リッピ氏の作品の初演を指揮。翌年、ニューヨーク・シティ・バレエ団のメンバーによる日本公演を指揮しバレエ界へデビュー。その後多くのバレエ公演を指揮する。95年の音楽舞踊新聞 No. 2342 紙上では、「彼の指揮する音楽は、躍動感も情緒もあり、間の取り方も巧み、最近では聴かせた音楽だった。」—白石祐史氏—と評される。

彼は現代音楽、宗教音楽、バレエ、オペラ、テレビ・ラジオの音楽とこなし、コンチェルトもヴァイオリンの宗倫匡、服部譲二、徳永二男、沢和樹、ヴィオラの川本嘉子、チェロの林峰男、ハーブの吉野直子、各氏と共演している。

現在、演奏活動の他に、作曲家入野義朗氏により創設された JML 音楽事務所で指揮講座を受けもっている。

WOLFGANG AMADEUS MOZART

ヴォルフガング アマデウス モーツァルト

OBOENKONZERT C-DUR K⁶.285D

オーボエ協奏曲ハ長調

ALLEGRO APERTO 快活に 開放的に
ADAGIO NON TROPPO ゆるやかに はなはだしくなく
RONDO, ALLEGRETTO ロンド、やや快活に

KEIKO OKAMOTO, OBOE

オーボエ独奏：岡本恵子

SINFONIE NR.41 C-DUR K.551

“JUPITER-SINFONIE”

交響曲第41番ハ長調 “ジュピター”

ALLEGRO VIVACE 快活に 速くいきいきと
ANDANTE CANTABILE 歩くような速度で 歌うように
MENUETTO, ALLEGRETTO メヌエット、やや快活に
FINALE, MOLTO ALLEGRO フィナーレ、とても速く

ISAO EHARA, DIRIGENT

指揮：江原 功

ICHIKAWA SYMPHONY ORCHESTRA

市川交響楽団

オーボエ独奏者紹介



岡本 恵子 (おかもと けいこ)

市川交響吹奏楽団に在籍。
東京芸術大学、シュトゥットガルト音
大卒業。第4回日本管打楽器コンク
ールオーボエ部門入選。
これまでにオーボエを故坂 逸郎、北島
章、小島 葉子、小畑 善昭、インゴ・ゴ
リツキーの各氏に師事。
元東京交響楽団オーボエ奏者。
ルヴァンヴェール木管五重奏のメンバー。

市川市文化会館新人演奏会出演者
によるコンチェルト

市川市文化会館は、毎年地元の音楽家に広
く発表の場を提供するため、オーディション
により選抜した若手演奏家による「新人演奏
会」を実施しています。わたくしたち市川交
響楽団は市川市文化会館のご協力によりこの
「新人演奏会」の出演者によるコンチェルト
をプログラムに組み入れ、アマチュアオーケ
ストラと地元音楽家の共演が実現しました。

■弦楽合奏■

オットリーノ レスピーギ

「リュートのための古風な舞曲とアリア」

横田佐貴絵 (ヴァイオリン)

この曲目紹介を編集者より依頼された時「イタリアのさわやかな風を感じるような紹介をお願いします」と言われた。困ったな…イタリアなんて行った事がないぞ！九十九里の風なら知ってるけど…だめでしょね、やっぱり。

この組曲の1曲目「イタリアーナ」の練習中にマエストロ・江原は言った「顔に髪がベターツとくつつくような風じゃなくて、ほおを髪がフツとなでるようなさわやかな風…」と。ふっとイメージがわいた。そして私達演奏者の音も変わっていったのだ。いいぞ いいぞ！

2曲目「宮廷のアリア」の練習中では、やはりベツタリとした演奏になりがちな私達に「男にフラれても“あっそう”ってすぐ次の男のところへ行くような人種なんだから（イタリア人の皆さん、あくまでも例えですから。お許しを！）、情熱的でもいつまでもうらめしく思っているような人達の音楽じゃないんだよ」と言った。おっしゃる事はよくわかったけれど、この時はさすがに音にはすぐ現われなかったな。そんな経験、みんな無いんだ…きっと（苦笑）。

ちなみに、この「宮廷のアリア」の原曲はリュート奏者ジャン・パティスト・ブゾールの作品で、次の題名で歌詞がついている。「恋しているのは悲しいこと」「さようなら、羊飼いの娘よ」「愛らしい眼よ」「かなたには愛の小舟が」「いかなる神が」「もしも私の純潔だけを」。そして彼は、旅に明け暮れた生活を送っていたらしい。なんとなく納得。

この組曲は題名通り、16世紀から17世紀の頃の作曲家のリュートのための音楽から採られている。レスピーギは、過去の音楽にも関心を寄せ、当時、流行から取り残されていた作品の編曲も多く手掛けており、これらは

学問的な業績というよりも、レスピーギの、古典への熱意を感じさせる編曲なのだ。

■木管合奏■

ヴァンサン ダンディ

「シャンソンとダンス」

(管楽七重奏のための喜遊曲)

古屋文弘 (ファゴット)

「管楽合奏」と呼ばれる合奏の形態は、種々の木管楽器と金管楽器に属するホルンから成りますが、弦楽器のみによる弦楽合奏に比べてジャンルとしての確立が遅れました。管楽器の性能を決定づけてしまうメカニクは、

19世紀中頃になって飛躍的に向上しましたが、この頃から19世紀後半にかけて管楽合奏はフランス音楽界でジャンルとしての形成をようやく成し遂げることができました。

この「シャンソンとダンス」を作曲したヴァンサン・ダンディ(1851-1931)はドビュッシーやラヴェルの先輩格にあたり、フランクの弟子としてパリ音楽院で音楽を学びました。ダンディのプロフィールの中

でユニークな点と言えば、青年期にワーグナーにのめり込んだのですが、晩年にかけてはワーグナーの熱病から醒めて、故郷南フランスの民謡を題材にした作風へと変貌をとげ、その中でこの「シャンソンとダンス」が生まれました。

一般の音楽愛好家の方々にはこの曲は殆んど知られていませんが、管楽アンサンブルの重要なレパートリーのひとつとされ、アマチュアの間では難しさが先に立って、そう簡単には手を出せない曲の中の筆頭といえます。

フルート:佐藤洋行 オーボエ:山下聡美

ホルン:嶋村恒夫 クラリネット:多田準也 半藤嗣人

ファゴット:菅原 斉 古屋文弘



シンバル
ウッドブロック
ガラスのボウル
小太鼓
ボンゴ

大太鼓
ティンパニ

チューバ
チャイム
ピブラフォン
マリンバ

■打楽器合奏■
ジョナサン ブラウン
「ストラータ」

打楽器:市原秀彦 笠原一郎 田中康信 谷口仁美 都筑 裕
チューバ:谷口 浩

■オーケストラ■

ヴォルフガング アマデウス モーツァルト

オーボエ協奏曲ハ長調 K⁶. 285d

吉野智久 (クラリネット)

この曲は一体どんな曲なんだろうと思った私は、オーボエ協奏曲だからと、オーボエ吹きのおさんに聞いてみました。すると、いきなり横からフルート吹きのおさんが口を挿んできました。

F(フルート):「オーボエ協奏曲って言うけど、ホントはフルート協奏曲の第2番なんだろう？」

O(オーボエ):「何を言っているんですか。オリジナルはオーボエ協奏曲なんです。モーツァルトがフルート協奏曲の作曲を頼まれた時に、1曲はちゃんと作ったけど2曲目は手抜きをして、ハ長調のオーボエ協奏曲をニ長調に変えてフルート協奏曲にしちゃったんですよ。」

私:「オーボエ協奏曲が作曲されたのは1777年、フルート協奏曲は2曲とも1778年とされていますね。」

F:「でも、フルート協奏曲としての方が有名だろ？」

O:「それはどうでしょうね。ただ、オーボエ協奏曲の楽譜が発見されたのは随分あとになってからですからね。」

私:「楽譜が発見されたのは1920年です…」

O:「それより、モーツァルトはフルートという楽器が嫌いだったみたいですね。」

F:「それにしちゃ、いくつも曲を作ってるけどなあ。」

O:「頼まれたから仕方なしに作ったんですよ。お金のために。」

F:「じゃあ、オーボエ協奏曲は何のために作ったんだ？」

O:「えーっと、それは…」

F:「オーボエ協奏曲も、元々あったフルート協奏曲をオーボエ用に作り変えたんじゃないかっていう説もあるみたいだよな。」

2人の議論は激しくなっていきます。どうやら私の居場所が無くなってしまったようなので、そろそろこの辺で失礼することにします。いつもは仲のいい2人なのに、どうしてこうなったんだろう？

※この話はフィクションであり、登場人物は実在の団員とはあまり関係がありません。

交響曲第41番ハ長調 “ジュピター”

吉野淳子 (ヴァイオリン)

“ジュピター”は、1788年8月10日に完成されたモーツァルトの最後の交響曲である。このニックネームについては、どの楽章をさして名づけられたものであるかはわからないが、いずれにしても、ギリシャの最高神ゼウス(英語で「ジュピター」)の名にふさわしいとこの命名を評価する人が多い。

…とまあ、固い話はこれくらいにして、この曲についてどんな印象を持っているのか、おおいに語ってもらおう。題して、“それぞれのジュピター観”!! (以下カッコ内は、ナゾのコメント師“J”によるもの。)

・ハ長調という調性も関係するのですが、簡単に言うと私にはモーツァルトの「巨人」という感じのする曲です。後期の3曲中でもスケール感の点でジュピターが一番だと思います。(→なるほど!)

・出だしといい、最後のフーガといい、雄大な感じがいかにもジュピターの名に恥じない堂々とした曲だと思います。(→さすが!!)

・私は1楽章の練習番号6のハッピーメロディーが好きです。思わず仕事中に口ずさんでいます。(→なんかカワイイですね!)

・モーツァルトのシンフォニーで初めて小宇宙を感じたのが、まさに、この曲の4楽章のフーガを聴いたときでした。…音を厚くせず、シンプルで繊細な響きと細やかで大胆な動きをして一つの宇宙空間が創造できるような演奏ができたと思います。…妙に力んで弾かずに、他のパートの音とのバランスを客観的に耳で聴きとりながら自己主張のできるような、そんな余裕をもってモーツァルトは弾きたいけど、それができたら苦労はしないでしょうね。理想と現実のギャップに自ら落ち込みながらも、ジュピターの宇宙に飛び出して漂流してみたい。なんて、思えてしまう、私にとってはそんな曲です。(→ウー、思い入れが強いんですね!)

・そうね…。許せないです。あれ(第4楽章冒頭のコト)を楽しんで弾いてこそ2nd Vn. Playerなのだ! あの曲は2nd Vn. が要なんだぜい! (→ちょっと無理してないか!?)

えっ、私ですか? とっても好きな曲です。ノリノリの第4楽章なんか特に。でも、もらったばかりの楽譜、製本もしないうちに失くしちゃったんですよ?

…乞うご期待!!

あんなこと、こんなこと。ちょっとした「？」を解決する市響ライブラリーへようこそ！

ケツヘル先生、ケツヘル先生！

今回とりあげたモーツァルトの作品にはこんな感じに「番号」がついています。

OBOENKONZERT C-DUR K⁶.285D

SINFONIE NR.41 C-DUR K.551

このK. (もしくはKV.)の後の番号は「ケツヘル」番号と呼ばれているもので、19世紀にケツヘルが編纂したモーツァルトの作品目録で使用された作品番号です。

音楽の世界では普通、作品番号というとしてOp. (Opus, 英語読みでオーパス) という記号を使って表しますが、有名な作曲家の場合は変わった記号が使われることがあります。たとえばバッハの作品はBWV(シュミターの作品目録による)という番号で一般に表されますし、他にはシューベルトのD(ドイツ番号)、ハイドンのHob(ホーボーケン番号)なども有名です。

モーツァルトに関する1851年に出版されたある書籍の内容があまりにひどいのに憤慨した、ウィーンの植物学者で鉱物学者であるケツヘル¹は自分で資料を収集しはじめ、1862年に現在単に「ケツヘル作品目録」と呼ばれている「モーツァルト全音楽作品の年代順主題目録」²という書物を出版しました。これはモーツァルトの全作品を

収録した初めての年代順目録であり、各作品毎に曲の冒頭部分の旋律やモーツァルト自筆譜の所在地などを記載したもので、初期のモーツァルト研究に大きな貢献をしたばかりではなく、モーツァルトの全作品を23のグループに分類するなど後世のモーツァルト研究にも決定的な影響を与えました。さらにケツヘルはこの「ケツヘル作品目録」を出版したブライトコプフ社³にモーツァルトの全作品を収めた楽譜集を出版することを提案し、自分がこの出版費用の3分の1を拠出することを約束します。結局この提案はそれまで未出版であった200曲あまりの初版譜を含む史上初めてのモーツァルトの作品全集⁴に結実します。この旧全集の編集者にヨハネス・ブラームスが名を連ねていたことは有名ですが、ケツヘルは資金面の援助だけではなく自身が所有する150曲あまりの筆写譜を提供するなどして、この大プロジェクトにできる限りの援助を行いました。彼自身はこの全集の完成を見ることなくこの世を去りましたが、このようなモーツァルト研究に対し多大な貢献をしたケツヘルに与えられた最大の栄誉は、自著「ケツヘル作品目録」に使用した分類番号が、彼の名前とともにモーツァルトの作品番号として現在も使われているということでしょう。

市川で唯一の日曜大工専門店

K・F・C日曜大工ストア

ホームマート

市川市宮久保3-35-8
電話 047-371-5353代表

住宅関連資材総合卸

岡野谷木材株式会社 直営店

HOMEMART
OKANOYA

ところが、その後の研究者たちの精力的な研究の結果、「ケツヘル作品目録」に掲載されている曲が実は偽作だったり、他人の作曲だと思われていたものが実はモーツァルトの作曲だったというような、多くの事実が明らかになりました。このような研究成果を反映すべくその当時のモーツァルト研究者を中心として、過去何度かケツヘル番号の改訂が行われました。有名なものはヴァルターゼーによる第2版(1905)、アインシュタインによる第3版(1937)、現在最も新しい版であるギーリング他による第6版(1964)ですが、この版においてはかなり大がかりな番号の改訂が行われました。



今回団内で、「勉強をするために買ったオーボエ協奏曲のCDにK.314と書いてあったが、これは今回演奏する曲と違うのだろうか」という質問があがりました。ケツヘルは基本的に、最初に作曲された(父親のレオポルト・モーツァルトが楽譜に書いたといわれている)ハープシコードのための「アンダンテ」に最初の番号(K.1a)を与え、その後作曲された順に番号を振っています。またケツヘル編纂時に実際にモーツァルトの自筆楽譜が確認できなかった作品についても、モーツァルトの手紙やモ-

ーツァルトに関係した人々が残した資料などをもとに作曲されたと思われるものには番号を振りました。したがって後世に資料などの発掘によりその真贋が明らかになったものや、特に戦後すすめられた自筆譜・写譜に使用された紙の品質や透かしの研究により作品の成立年が当初のものからずれたものについては、過去の改訂において作品番号が大きく変わったものもあります。たとえば交響曲第24番変ロ長調は、1905年の第2版ではK.182、1937年第3版ではK.166c、1964年第6版ではK.173dAとすでに3回も番号が変わっています。今回取り上げたオーボエ協奏曲も当初K.314を与えられていましたがフルート協奏曲と同様のK.285dという

番号が振られました。このため録音年代やレコード会社のポリシーによっては旧番号が使われるということもあるわけです。

- 1 Ludwig Ritter von Köchel (1800-1877)
- 2 Chronologisch-thematisches Verzeichnis sämtlicher Tonwerke Wolfgang Amadé Mozarts
- 3 Breitkopf und Härtel. 現在の本拠はヴィースバーデン
- 4 現在「旧全集」と呼ばれているもの. Wolfgang Amadeus Mozart's Werke. Kritisch durchgesehene Gesamtausgabe 全23巻補巻1巻 1877-1910 Breitkopf und Härtel

最新、より細心。

トータル・システムでサービス致します。



創業63年の総合印刷企業
錦野印刷(株)

〒272-0025 市川市大和田4-12-14
☎047-377-3341

市川交響楽団・本日の出演者

コンサートマスター 福原 祥子	松延 裕子 溝田 範子 村上 葉子	チェロ 倉沢 倫子 倉沢 由和 瀬川 清	オーボエ 二村 直子 山下聡美
ヴァイオリン 石本 恵理 鎌田 真貴 亀井 玲子 河村 智行 島原 千晶 鈴木 薫 高田 賀夫 竹内 甲 竹内 まり 堤 哲児 永田 匡 根守 弘和 福原 亜希	村田 康代 横田佐貴絵 横田富美子 吉岡 一郎 吉野 淳子 渡辺 昭子	中村 公一 日澤 優 福原 耕二	ファゴット 金坂 哲 古屋 文弘
	ヴィオラ 相馬 正典 柿沼ひとみ 奈良林弘子 原口 博司 水野 桃子 村上 賢一 渡部 玲子	コントラバス 池田 和正 上村 啓介 菊池 克彦 鈴木 重則 村上 信乃	ホルン 近藤 利昭 藤井 茂司
		フルート 木村 純一	トランペット 一桵 泰一 新井本昌宏
			打楽器 都筑 裕

1998 市川交響楽団 活動予定

5/5 (祝)

第267回「市響ジュニア演奏会」

7/12 (日)

第268回「交響楽の午後」

7/31-8/2

全国アマチュアオーケストラ連盟
金沢大会

10月

千葉県、市川市委託演奏会

12/20 (日)

第271回「ファミリー交響楽」

市響へのお誘い

当市川交響楽団（市響）は、いろいろな職業をもつ幅広い年齢層の団員で構成されており、アットホームで楽しく和やかでかつめんどろ見がよいことをモットーとしている市民オーケストラです。社会人の方で、オーケストラで演奏経験のある方、前にやっていてずっと弾いていないけどまた始めたいな、こちらに引っ越してきたのだけどいいオケないかな、一度オーケストラで皆と一緒に演奏したいな、といった方は当市川交響楽団にぜひご参加ください。また市川交響楽団協会には、歌を歌いたいのだけどという方にぴったりの市川混声合唱団、行徳混声合唱団、いや私はブラスバンドがいいなという方には市川交響吹奏楽団、高校生以下の学生の方には市響ジュニアオーケストラがございます。こちらにもぜひどうぞ。

1999年8月には、わたしたちが幹事団体となって、全国アマチュアオーケストラ団員が集う「アマオケフェスティバル市川大会」が開催されます。

見学や入団ご希望の方は、下記あてお問い合わせください。

市響インスペクター 時田

TEL 03-3600-0063 / FAX 03-3600-0293

市響インターネットホームページ <http://plaza8.mbn.or.jp/~ichikyoy/>

次回の市響演奏会のご案内 ICHIKYO NEXT CONCERT

1998 7/12

第268回市響 交響楽の午後

ドヴォルザーク／交響曲第7番 二短調
チェロ協奏曲 口短調

指揮：野宮 敏明（浦安シティフィル指揮者）
独奏：藤森 亮一（NHK交響楽団首席チェロ奏者）

7月12日（日）市川市文化会館大ホール 午後2時開演

入場券は市川市内の文化施設でお配りする予定です
またインターネットの市響ホームページからもダウンロードできます